学苑　第九一〇号　五七～七〇（二〇一六・八）

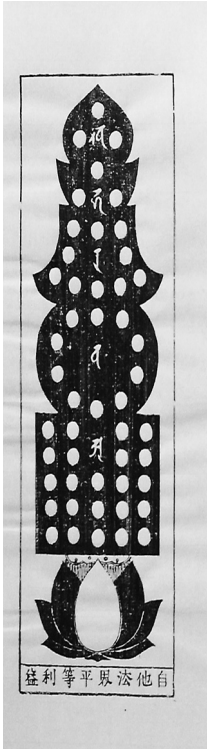
〔資　料〕

一枚摺の世界
――その小釈の試み（7）

関口　静雄・岡本　夏奈・阿部　美香

三重県松阪市白粉町所在の天台真盛宗教主山無量寿院来迎寺がかつて印施した同寺蔵釘念仏札三種を紹介する。旧幕時代、来迎寺は戒称二門不断念仏を宗風とする天台律宗真盛派の寺院として寺格が高く、松坂城下において浄土宗法幢山樹敬寺・浄土宗三縁山清光寺とともに樹清来三ヶ寺と呼ばれる触頭寺院だった。三井家はじめ角屋家・長井家など松坂の豪商たちが檀家として帰信し、したがって襲蔵する法宝物も優品が少なくない。現当山三十四世青木教恵師は資料公開に理解を示されたばかりでなく、種々大切なご教示に添えて貴重な資料を恵与せられた。深甚の謝意を奉る次第である。

①　松阪来迎寺版釘念佛札　木版　二七・五×一八・六㎝



現在も日光山常行堂で頒布される「日光山寂光寺釘念佛札」と同じ図様のものであるが、「本願　覺源上人」「日光山寂光寺釘念佛」の刻字はなく、五輪塔下に横書きで「自他法界平等利益」と刻字されている。寂光寺の釘念仏札は文明七年（一四七五）乙未十月二十日に頓死した寂光寺上人龍泉坊覚源が冥府で閻魔王から「五りんに四十九の釘のあなある札」を授けられ、蘇生後に梓行したものであった。それから二百余年後にも図様に変化がな

〔解　題〕「おふだ」について（5）　釘念仏御札〈その四〉

罪悪迷妄の凡夫はその臨命終時に一身支節のことごとくが断壊する断末魔の死苦に苛まれ、なおさらに死後は地獄に堕して一身四十九の支節に大小四十九本の鉄釘を打たれて激痛に苦しむという。佐渡の彈誓流木食聖たちが師資相承した断抹磨秘法と釘念仏秘法の両法はともに人間一生の末期の苦しみと没後の苦しみを解除し安楽の浄土に赴かしめる秘法であって、それこそは衆庶の臨命終時に寄り添い、死者の供養をこととした木食聖の専修必修の秘法であった。断末魔脱苦の修法は木食に限らず天台・真言密教においても不動明王を主尊として修法せられたのであって、『除斷末魔苦作法』を著作した如法真言律の河内地蔵寺の惟寶蓮体は『祕密安心往生要集』（享保三年〈一七一八〉八月十五夜叙）に、断末魔苦とは何かという問いに、「末摩ハ梵語ナリ。支節ト翻ズ。身中ノ三百六十ノ支節ヲ。断壊スル苦ミナリ。是ヲ死苦ト名ク」といい、「此苦ヲ免レント思ハヾ。一百日ノ間ニ毎日不動ノ慈救咒一萬遍ヅヽ唱ヘテ。百萬遍ヲ滿ズレバ。此ノ苦ミヲ免レテ正念安祥ニ往生ストイヘリ」と答えている。ここに蓮体は断末魔の死苦を脱するには不動明王の慈救呪を日々一万遍ずつ百日間に百万遍の誦唱が必須の要件だと説いているが、それは江州日野の木食進誉澄禪が一七日間に如法の百万遍念仏を行じた断抹磨秘法の百万という巻数法において通底し、また弥陀名号口称万遍は念仏四十九万遍という釘念仏に通底する。そうであれば断末魔苦・釘苦を解除し安楽の浄土に赴かしめる秘法のいずれもが、百万遍念仏の影響下に形成されたものであることは容易に諒解されよう。

かったことは、延宝四年（一六七六）三月に寂光寺に参詣した増上寺の僧恵中が『日光山寂光寺釘念仏縁起聞書』に、覚源上人梓行の釘念仏札は「黒キ五輪ニ白キ釘ヵ穴四十九アリ」と伝えていることからも明らかである。

② 松阪来迎寺版五輪念佛圖　木版　三三・〇×一二・四cm

（右）文明年中ニ野州日光山寂光寺ノ覺源上人俄ニ死シテ至ニ于冥府一閻王命シテ令三歷覽セ地／獄ヲ既ニシテ而出シテ五輪ノ圖ヲ告テ上人一ニ曰罪惡ノ衆生死シテ到レル此ニ時獄卒先ッ釘ウッ二一身支節ノ四十／九所ニ苦ミ不レ可レ言感應冥理無レ可ニ奈何イカントモス一若有テ二男女一爲ニ稱ニ阿彌陀佛ノ名號四十九

（右）万遍ヲ一塡ウヅミテ二五輪ノ圈マルヲ一眞實ニ回向スレハ亾者離レテ苦ヲ必ス生ス淨土一ニ若シ其レ善人ナレハ受ケ此ノ功德ヲ增ニ長善／根ヲ上品往生ス汝還テ人間ニ當シトテ語テ此事ヲ普ク救フ衆生上ヲ乃チ授ク五輪ノ圖ヲ上人蘇生シテ其ノ圖在リ／于掌中ニ爾ヨリ來タ人民毎レ逢ニ亾者ノ中陰ニ多ク依テ此圖ニ念佛追福スル者ノ屢ク有ニ靈驗一云

右は、先に紹介した「所帰命阿弥印施五輪念佛圖」（版行所不明、宮島コレクション蔵）と同様の図様であるが、表記梵字の大小、五輪塔の姿形、釘穴の大きさ等に微妙な相違がある。紙面中央に梵字「南無阿彌陀佛」を配した五輪塔を描き、上部中央に「南無阿彌陀佛」、その左右に「拔苦與樂／五輪念佛」とあり、下部に横書きで「松坂来迎寺」と刻字されている。紙面左右に記された釘念佛の略縁起は「所帰命阿弥印施五輪念佛圖」のそれとほぼ同文であるが、来迎寺版の方がよほど整った文章になっている。

③ 松阪来迎寺版盛門血脈五輪念佛圖　木版　三三・二×二四・二cm

釋迦如來
阿彌陀佛 ─ 天台大師 ─ 傳教大師 ─
眞盛上人 ─ 眞謙上人 ─
盛品上人 ─ 妙有上人

「松阪来迎寺版釘念佛札」「松阪来迎寺版五輪念佛圖」と同様の五輪塔圖に天台律宗真盛派の血脈を付したものである。その血脈は盛門における来迎寺の相承を略出したものであり、この札を受け四十九万遍唱を満了した信徒がすなわち妙有上人の血脈に連なることを示している。

※

教主山来迎寺は、久世兼由撰『松坂権輿雑集』（宝暦二年〈一七五二〉序）に引く「當寺傳記」等々によると、永正八年（一五一一）、伊勢国司北畠家第六代権大納言材親（一四六八～一五一八）が、比叡山横川慧心院の修行僧丹後入道俊継の意見を容れて戦死者供養と罪障懺悔のために松ヶ島城南口の古戦場細頸に三宝供養の道場一宇を建立したのが始まりと伝える。権大納言材親はかねて真盛上人の高徳を慕い面談の機を懇望していたところ、明応二年（一四九三）上人が当地行化の折り斎宮の安養寺で参会し、上人より諫暁せられ道法を示されてますます信伏し、以来上人の教訓を家政や

治国の基本にしたという。材親は上人没後の永正十年（一五一三）秋、上人ゆかりの津の龍宝山西来寺から同寺三世盛品を請じて三宝供養の道場を改めて不断念仏の道場を開き教主山真盛堂来迎寺と称し、盛品を第一世とした。その後、天正十二年（一五八四）江州日野の蒲生氏郷が松ヶ島城に移封されると、氏郷は四五百森に新城を築き、同十六年（一五八八）入城し、その地を松坂と改めた。これにともない来迎寺も三世勝慶によって松坂湊町に移されたが、享保元年（一七一六）十二月の松坂大火によって塔頭覚性院を残して悉く焼失した。十六世真澄は寺地を白粉町の現在地に移して再興を企て、十七世此峰・十八世提山の三代にわたる営為努力によって享保十六年（一七三一）三月本堂および諸堂の再興が成就した。現存の建物がそれで、以降来迎寺は松坂において天台律宗真盛派の中核寺院として今日まで確固としてその法灯を継いでいる。

来迎寺は多くの優れた僧を輩出したが、中でも二十七世荷寮妙有（一七八一～一八五四）は稀に見る高僧で、津の西来寺三十一真阿宗淵（一七八六～一八五九）、久居木造村の引接寺十九世喚阿法道（一七八七～一八三九）と並び伊勢の盛門三哲と称された。三師はいずれも優れた学僧であり徳行にも優れ、また互いに交流を持った。宗淵は天台学に精通し、声明・書誌学・音韻学等にも造詣が深く、法華経の本文と読誦法を精査したことで知られ、「山家本法華経」「魚山叢書」「北野文叢」はじめ、その著作は百余部三百余巻、開版は六十三部百一巻にのぼり、世念ないその学業は精緻かつ膨大であった。法道は天台律宗教学の大成者で、また熱心な念仏行者であった。『安心摘要抄』『先徳法語集』『三法語略解』『称名庵雑記』『称名庵和歌集』などの著作があり、化益と慈善の僧としても知られる。妙有は慈雲尊者遷化の前年に受法した尊者最晩年の弟子で、尊者没後二十年間写本によってのみ伝えられていた『十善法語』十三巻を初めて開版した人として知られる。妙有は慈雲の著作をはじめ多くの仏書を開版印施していて、来迎寺三十三世青木龍孝師「妙有上人」（『雙龍』六号、昭和四十八年九月）によると、現在確認できるものだけでも三十八本あり、生涯の施本は五十本に及ぶと推測され、そのほかにも一枚刷の曼陀羅・勧進状・御影札なども多種多数印施したという。

妙有はその自筆年譜によると伊勢一色村の人で、十六歳のとき伊勢山田の摂取山善光寺に入り、華蔵房義隆和尚に従って剃髪した。二十歳のとき京都鈴声山真如堂の義諦律師について修学し、そこでのちに梵暦護法運動の開祖となった普門円通律師から仏国暦象編を学ぶなどし、二十三歳のとき洛西阿弥陀寺にいた真言宗の慈雲飲光（一七一八～一八〇五）の膝下に参じ、許可灌頂を受け、併せて胎蔵界現図万荼羅・五部秘経等を伝授されている。慈雲は正法律を唱え、雲伝神道を開き、生前に尊者と敬称された不世出の高僧であって、慈雲のもとには諸国からその学徳を慕って多くの僧が雲集したが、他宗の妙有が弟子として許可灌頂を授けられたのは、おそらく妙有が持戒持律の律僧であったからだと考えられる。

妙有はまた化行と徳行にも傑出していた。大和国稗田の融通念仏宗常楽寺の詮海（一七八六～一八六〇）は諸国に修行して禅・律・密教を修め摂津大念仏寺の講主となって融通律を唱えた人であるが、その詮海が文政九年（一八二六）春伊勢参詣の折り山田善光寺を兼住していた妙有を尋ねている。詮海はのちにその見聞を『伊勢紀行』に「勧導丕いに妙有上人に如くは無し、妙有上人、始めて文政七年より士女を勧誘す、日課を誓ふもの八百餘人、就中、篤信者の日課念佛數萬聲に至り、孜々として怠らず、熾なりと謂ふべし、此地神道殊に盛んにして、在家半ばを過ぎ、佛を信ぜずといふ、然るに此の如き法化有り、豈に和光の方便に非らんや」と記して妙有の化行を称賛している。

天保の飢饉は享保・天明に続く江戸三大飢饉のひとつで、天保四年（一八三三）の大雨によって洪水や冷害が生じ大凶作となった。東北地方の被害が最も大きかったが、大坂でも毎日約一五〇～二〇〇人を超える餓死者を出していたといい、天保八年（一八三七）二月に起こった大塩平八郎の乱の原因にもなったとされる。その折、妙有は窮民施行を行って、のちには「伊勢の釈迦」と称された。妙有の粥施業を引接寺法道の高足法龍は『芳躅随順抄』（弘化元年〈一八四四〉）に次のように伝えている。

山田善光寺にては、天保七年十二月十五日より翌年四月晦日まで一日も廃し玉ふことなし。則飯台にて一人につき大なる椀に粥三杯づつ与え玉ひぬ。総計　四万九千四百五十人余

松阪来迎寺にては、天保七年十月より翌年四月晦日まで一日も間断なく施し玉ふ。当地にては、一人に就三合入の杓に粥一杯づつ与へ玉ひぬ。若又、嬰児にても負来る時は是にも同様に給与せられぬ。十月より翌年正月迄計一万三千八百七十人余。又二月朔日より同月晦日迄其人数二万九千二百九十人。三月朔日より晦日迄其人数三万四千六百四十四人。四月朔日より晦日迄其人数三万八千六百七十二人。

右総計　十七万五千九百十四人也　私云、是も大数なれば具に数えなば十八万人余になるべし

妙有ばかりでなく、西来寺宗淵も引接寺法道も天保の飢饉の折りには周辺衆庶に徳施を行っているが、妙有の徳行はまことに顕著であって、翌八年、領主紀州藩十代徳川治宝から褒賞と「無量寿」額字を下賜されている。

※

おそらく右に掲出した来迎寺版釘念仏札は妙有が印施したものと思われる。それは三種の釘念仏札のうち「盛門血脈五輪念佛圖」に示された盛門の血脈からも推量される。とくに教主山真盛堂来迎寺初世の盛品上人に次いで、歴代を超えていきなり二十七世の妙有の名が記されているのは、来迎寺において釘念仏を始修したのが妙有であることを明示している。もちろん釘念仏四十九万遍の達成者は妙有上人に続いてその名が記され盛門の血脈に連なることができるのである。

来迎寺初世盛品は真盛上人の葬儀の折りには鉦鼓役を務めた上人の直弟で、津の西来寺住持を二世盛算没後の明応三年（一四九四）に三世を継いで大永六年（一五二六）九月十二日に没するまで三十二年余を同寺住持位にあった人で、その間、明応七年（一四九八）の津地震で打撃を受けた同寺を、堂塔伽藍を整備し、枝院を開創し、中部伊勢一帯に二百余の末寺を従える大寺院にした敏腕の大功績者であった。おそらく来迎寺は兼帯であったはずで、盛品留守の来迎寺の日常寺務は誰人かに執らせていたものと思われる。慥かな証左があるわけではないが、その留守居役は伊勢国司北畠材親に三宝供養道場を開かせた比叡山横川慧心院で十六年修行したという丹後入道俊継ではなかったろうか。そしてその丹後入道俊継こそ「盛門血脈五輪念佛圖」に示された盛門の血脈のうち真盛上人に次いで記された真謙上人ではないかと思われるのである。真謙上人は血脈からすれば真盛上人の高足であるはずだが、しかし管見では真盛上人の門弟中にその名が見出せない。来迎寺の前身である三宝供養道場の住持たる丹後入道俊継は同寺の歴史からすれば初代住職であるが、三宝供養道場が盛門の不断念仏道場に改められて盛品がその初世に迎えられて以後も俊継は来迎寺に止住し、留守居役として寺務を執っていたものと思われる。もしそうであるとすれば、俊継は真盛上人生前に弟子の礼をとり真謙の法号を授けられていたものと推量される。なお、丹後入道俊継について色井秀譲氏『真盛上人末世の聖・その史実と伝説と信仰』（一九八二年五月、仏教書林中山書房）は、盛門の本山西教寺に真盛上人が明応二年（一四九三）九月に近藤丹後入道なる人物にあてた書状が伝えられていて、この近藤丹後入道は丹後入道俊継と同一人物だと指摘されている。

※

天台宗盛門派の開祖真盛上人（一四四三～一四九五）は、文明十八年（一四八六）後土御門天皇より上人号を、永正三年（一五〇六）後柏原天皇より円戒国師の諡号を、明治十六年（一八八三）には明治天皇より慈摂大師の諡号を下賜されている。このことからも窺い知られるように、戦国時代において上人が治国安民策として説いた無欲清浄専勤念仏の宗風は、天皇はじめ親王・公卿・国司・守護等の為政者に大きな影響を与えたのだった。

上人は伊勢国一志郡小倭荘大仰の人で、紀貫之十七世の末孫という。父小泉藤能は伊勢国司北畠家第四代教具の侍衛士だった。七歳で同国川口の光明寺に入り、十四歳のとき同寺盛源律師に師事し出家して真盛と称した。十九歳のとき比叡山にのぼり、西塔南谷北上坊慶秀和尚の室に入り、爾来二十年間叡山を出ず、ひたすら天台教学の蘊奥を希求して伝灯法師位に進んだ。しかし文明十四年（一四八二）四十歳のとき母の死に遭って無常を感じ、翌年春、寿塔を建てて叡山黒谷青龍寺に隠棲し、恵心僧都源信の『往生要集』の義に徹して出離生死の要道を究めた。やがて『往生要集』を講じて世に知られるようになると、朝廷より法談を望まれるまでにいたった。文明十八年（一四八六）、源信の旧跡叡山麓坂本の戒光山西教寺に招かれると、ここを不断念仏の根本道場として一派を創始した。以来没する

までの十年間に近江・山城・越前・若狭・伊勢・伊賀・摂津・河内・和泉等の諸国を巡化し、戒律と称名念仏の一致を唱え、無欲と慈悲を説き、その応化は上は天皇から下は庶民に及び、ひいては禽獣鳥類まで帰依渇仰したという。巡化中の明応四年（一四九五）二月三十日、伊賀国長田の医王山西蓮寺で坐定し、そこに葬られた。五十三歳だった。

真盛上人御影
西蓮寺紫雲堂版
（宮島コレクション蔵）

真盛上人名号
越前引接寺版
（宮島コレクション蔵）

盛門派は江戸幕政下においては山門や東叡山の激しい干渉に遭って天台律宗と公称せしめられた。しかし、西教寺二十四代真鳳による勧学寮の創建や、妙有・宗淵・法道らの学僧が輩出して宗学が興隆し、別派独立の土壌を形成したといわれる。真盛が開いた盛門派の教儀は戒律堅持を重んじながらも称名念仏を勧め、また徳行に精励したから衆庶の帰依と厚い信仰を得た。来迎寺妙有が印施したであろう釘念仏札は、おそらく多数の横死者を出した天保飢饉の終息後であったと思われる。

（関口靜雄）

真盛芳躅　傅益瑤（フーイーヤオ）画（部分，宮島コレクション蔵）

19. 勢州豊久野銭掛松旧跡図

木版多色摺　三四・〇×二四・三㎝
明治二十一年三月十二日（宮島コレクション蔵）

［明治二十一年三月十二日出版御届］

小野の篁の
命姫故有て
此松に銭を
懸られしに
其銭蛇と
なりし圖
由来は
縁記に有

勢州豊久野
銭掛松
舊跡圖

印刷兼　三重縣平民
発行者　懸辨阿
販賣所　伊勢國河藝郡高野尾村七十四番地

定價金三銭

銭掛松は伊勢別街道にある。三重県津市高野尾町には今も何代目かの松が立っている。右の図は、小野篁の妻である命姫が伊勢参宮に向かう途中に起こった出来事を描いたものである。銭掛松の由来について『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』（嘉永五年〈一八五二〉九月再板／宮島コレクション蔵）は次のように記している。

人王五十四代仁明帝の御宇承和年中に小野の篁承レ詔病に辞し隠岐の国にながされ人となれり篁か妻別をおしみ足すりすれとも其かいなしひそかにやかたを忍いて叡山の邊に居にけるがそこをも夜半にぬけ盲人一人つれて太神宮へ心さし伊勢路をさしていそけともうゐ旅なれはつかれはて漸此野につき給ふ草かり男をかいまみて是より伊勢大神宮迨道法何ほとそと問せけれはかの男おもへらくいとなまめいたる女たゝ人ならすみへけれはたはむれて音にも聞給ふへし十日通る豊久野七日とをる長縄手三日通る三渡るとていまだ廿日路なりといへは女性力を落しかきりしられぬ旅の天迚もかなふましと道の邊みれは廣野に一本の松有是を大神宮と拝み奉らんとていとはしたなく盲人かかたに懸たる銅銭貫なから松か枝にかけ伏拝み休らひけれは草かり男共立よりて掛たる銅銭をとらんとせしに忽両頭の蛇となり口より炎を吹出しあたりへ寄事なりかたし男おとろき女性盲人をだきおこししさい如何にと尋れば我〳〵はみやこかたの者なるか其通路の遠しと聞此松を太神宮と拝懸奉しとなん語ければおそろしき男の心も天照御神のいちしるき神とくきもにめいじ又やさしくも女性盲人をともなひ斎宮迨そ送けり

これによると、命姫は隠岐に配流された篁の赦免帰京を祈願するために伊勢参宮を決意している。篁が隠岐への流罪に処されたのは承和五年（八三八）十二月であるから、命姫が篁の配流後すぐに伊勢神宮に向かったと考えるならば、『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』の舞台は承和六年（八三九）の春頃であろう。

『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』によると、現在も三重県津市高野尾町に所在する銭懸山豊久寺は、最初は単なる草堂であったが、浄土真宗十世の知識真恵上人に庵主が帰依して真宗高田派の寺院となったという。この『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』は当時の住職「辨

順」が、本堂建立の助力を得るために旧記を開いて新たに略述したものだという。おそらく『豊久野銭掛松旧跡図』も同様の趣旨で版行されたものと考えられ、発行者である「懸辨阿」も「懸」は銭懸山の意であるから豊久寺の住職であろう。

『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』の初版は宝暦十一年（一七六一）で、嘉永五年（一八五二）に再版され、『豊久野銭掛松旧跡図』は明治二十一年（一八八八）三月に版行されている。銭掛松と命姫の話はおよそ百三十年に亘って豊久寺において語り継がれていたことが分かる。明治二十年前後は『大和国矢田山金剛山寺伽藍並練供養図』（明治十六年〈一八八三〉）、『小野篁一代記』（明治二十二年〈一八八九〉九月）、依田学海作『小野篁』（明治二十三年〈一八九〇〉）など、篁関係の作品がいくつか発行されているから、おそらく『豊久野銭掛松旧跡図』もこれらの流れの影響を受けて作られたと考えられる。

『豊久野銭掛松旧跡図』は上に詞書、下に図を配置し、図の中央に大きく松の木が描かれている。松の根本には黄丹色の衣を身に纏った命姫が腰を下ろし、両腕で杖を抱え、足元には黒い市女笠が置かれている。その斜め後ろには、紺青色の長着と白い袴を着た盲人が頬杖をつきながら寝転がっている。松の枝には両頭の蛇がおり、三人の草かり男に向かって真っ赤な炎を吐いている。男たちは盗ろうとした銭が蛇に変化したことに驚き、その炎から逃れようとする。右側の男は紺青色の長着と焦茶色の袴を着ており、蛇を直視して追い払うかのように片腕を右斜め上に振り上げている。左手前の男は腰を丸め、幸菱紋が織られた白茶色の衣で身体を覆い隠しながら走り出そうとする。左奥の男も幸菱紋文様の白茶色の衣と焦茶色の袴を着ており、右手には草刈り用の鎌を持っている。その足元には刈られた草の入った籠が横たわっている。休息する命姫・盲人側の静と、蛇に驚く草かり男側の動、この対比構図が印象的である。

『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』に付された図においても、中央に松の木、枝に両頭の蛇、右側に命姫と盲人、左側に三人の草かり男という基本的な構図は同じである。命姫と盲人が立っており、蛇が火を吐かずに舌を出しているというような多少の違いはあるが、『豊久野銭掛松旧跡図』が『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』の画図を基にして描かれたのは間違いない。『豊久野銭掛松旧跡図』中の「由来は縁起に有」とは、この『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』のことであろう。

篁は承和七年（八四〇）に罪を赦されて帰京しており、早期に帰京するに至った理由については篁の才学が優れていたためとするのが定説である。しかし『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』では篁の才学については一切触れず、命姫が伊勢参宮をしたことによって篁の罪が赦されたとしている。つまり朝廷に対して諫言を行い配流された罪人であっても、代理人として妻が伊勢参宮を果たせばその罪が赦されるとし、天照大神の霊力の高さを強調しているのである。浄土真宗は「神祇不拝」を掲げているが、その一方で親鸞聖人が何度も鹿島神宮に参詣しているなど神道との関わりはあり、伊勢神宮とも何らかの形で関わっていたとしても不思議ではない。浄土真宗高田派は津市の専修寺が本山であり、当地における寺院の一大勢力であった。豊久寺は伊勢別街道のすぐそばに位置するため、接待寺院と

『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』付図

しての役割を果たしていたのではないだろうか。

命姫の同行者として盲人が選ばれたのは、盲目という身体の欠損・異形性によって世俗では穢れた存在とされながらも、祭祀においては世俗的秩序を超えた聖なるものと考えられた二面性が関係していると考えられる。これは、罪人として裁かれる側でありながら冥官として救う側でもあった篁と通じるものがある。比叡山近くで命姫が出会ったとされる盲人は実際には盲僧であろうが、僧侶は伊勢内宮の正殿への参拝が禁止されていたことから、「盲人」と記されたのであろう。

また、盲人と小野氏には京都市山科区四ノ宮の地を介した繋がりがある。篁が彫像した京都六地蔵のうちの一体、山科地蔵が安置されている柳谷山徳林庵（臨済宗南禅寺派）がある山科区四ノ宮は、盲目であった仁明天皇の第四皇子人康親王、そして蟬丸法師が隠棲した場所である。『当道要集』[1]によれば、盲人達は二人を座頭・琵琶法師の祖神として崇拝したという。室町時代には当道の盲僧たちが山科地蔵像に対しても信仰心を持つようになったとも伝わる。そして四ノ宮の近くにある山科区小野は小野氏が栄えた地であり、『当道要集』は人康親王薨去の記事において、

小野小町此宮の御事をもてはなされていとおしみ深く思ハれけるにや
けふきこしかなしの宮の山風に亦あふ坂も嵐とそおもふ
といふいたみの和歌を奉られけるとかや此歌ハ小野の家集に有と承り候ひき

という話を載せている。また、『小野小町行状記』（明和四年〈一七六七〉）巻之七「四ノ宮人康薨ニ山科宮ニ并ニ渤海國使聘ニ日本國ニ」には、

常ニ小野小町ガ和哥ニ秀逸ナルヲ愛タマヒ。時々小町ヲ山科ノ幽居ニ召レ。歌哥ノ友トナシタマヒシニ。計ラズモ薨去アリケレハ。小町哀哭スル支切ニシテ。[2]

と記されるなど、江戸時代において人康親王と小町に繋がりがあったと考えられていたことが分かる。また、篁の末裔と伝わる横山党の子孫、萩野氏の生まれである塙保己一も盲人として当道座に属し、明和三年（一七六六）には父親とともに伊勢参宮を果たしている。小野氏と盲人の関係についてはいずれ詳しく述べたい。

銭が蛇になる伝承は、『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』において草かり男たちが天照大神の神徳を感じたように、天照大神と蛇の繋がりが関係している。蛇は脱皮を繰り返しながら成長していくことから不死や永遠の象徴と考えられ、祖先神としても崇拝された。縄文時代においては蛇を頭に乗せた巫女を象った土偶が作られている。鎌倉時代の伊勢神宮参詣記である『通海参詣記』（寛文二年〈一六六二〉写／内閣文庫蔵）には、

サテモ斎宮ハ皇太神宮ノ后宮ニ准給テ夜々御カヨヒ有ニ、斎宮ノ御衾ノ下ヘ、朝毎ニ蛇ノイロコ落侍ヘリナント申人有。[3]

と記されており、天照大神が蛇であり、斎宮は蛇巫であると考えられていたことがわかる。銭掛松に銭を掛ける行為に参宮と同じくらいの御利益があると伝わるのは、銭掛松に天照大神が宿っていると考えられたからであろう。

松も古くから神の宿る神聖な木とされ、長寿・繁栄・慶事・節操を表すものとして尊ばれた。正月の門松に「神を出迎える」意味があるように、その語源には「（神がその木に天降ることを）待つ」とする説もある。柳田國男氏は「参宮松の口碑」において、松の木が人となって伊勢神宮に参詣する話が秋田県大館市や新潟県佐渡市などに伝わっており、その源流は豊久野の銭掛松であろうと述べている。[4] 銭掛松は何度か代替わりが行われており、隣接する堂内には、初代銭掛松の枯れ木が祀られている。『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』によると、往来の旅人はこの木を削って郷里への土産にしたという。現在植えられている松が何代目にあたるのかは諸説あるが、この代替

銭掛松堂内　初代銭掛松[5]

わりは伊勢神宮の遷宮を連想させる。

銭掛松の由来は『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』のほか、『勢陽雑記』（明暦二年〈一六五六〉）、『和漢三才図会』（正徳二年〈一七一二〉）、『伊勢参宮細見大全』（明和三年〈一七六六〉）、『伊勢参宮名所図会』巻之二（寛政九年〈一七九七〉）、『伊勢海道銭懸松』上巻（文政十三年〈一八三〇〉）などにも記され、「伊勢海道銭掛松」（元文四年〈一七三九〉二月大阪中村十蔵座）という歌舞伎も上演されている。右の諸伝のうち、『豊久野銭掛松旧跡図』『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』に最も近いのは『勢陽雑記』所収のものである。

昔遠国より伊勢参宮者、此野辺の茶屋に休らひ、あるじに尋ねけるは、こゝより宇治山田へは道のほどいか計りぞやといひければ、十日通る豊国野、七日通る長い縄手、三日通る三わたり、などいひて、いまだ日数いくばくの行程ぞやとこたへ侍れば、参宮人のいはく、さてはあしのたくわへもいと乏し、信心のほどは神もおうけあらん、いざやこれより帰路に赴かん、とて寸志の祭銭をつなぎつゝ、此松が枝に、掛まくもかたじけなし、とふしおがみ、それより故郷に帰りける。その跡にてかの茶屋のあるじやす〳〵とたちより、かの銭をおのが物にせんとてとらんとしければ、忽ち蛇に変じて恐ろしかりければ、其後は野中の茶屋も住みうかりけるにや、こゝかしこと所まどひやがで狂人と成けると云々。扨かの参宮人故郷に往きて参宮せし人々に、かかる所より下向せし事をかたり侍れば、友だちども、扨も今すこし斗りの道の程なるものをといひて、又のとし案内する人々ともなひ参宮しける時、かの松のもとに至りて、過ぎにし年銭かけし松枝を見れば其時の祭銭つなぎかけしありさますこしもたがはず其まゝあり。また茶屋のあるじの成果し事どもそのあたりの物語りなど聞くにつけても、いよ〳〵信心肝に銘じて参宮を遂げ侍ると云々。[6]

伊勢参宮を希望する者が旅路の途中において嘘をつかれたことで参宮を諦め、松の枝に銭を掛けて祈願する。その銭を盗もうとした者は罰を受け、後に参宮者は案内人を得て無事に参宮を遂げる点が共通する。成立年から考えるに、豊久寺は『勢陽雑記』を参考にして『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』を執筆した可能性が高い。

一方、『伊勢参宮名所図会』には銭掛松の由来が二説記されている。一つは、雄略天皇の時代において豊受太神を丹波国から勢州へ移すときに行宮を作り、その跡を失わないために印として小祠と松を植えたという説である。小祠がなくなってからは、人々が御供料として松の枝に銭を掛けたことから銭掛松と呼ばれたという。もう一つは、豊斟渟尊の社があったが後になくなり、その跡地に松を植えて銭掛松となったという説である。義田孝裕氏は、『伊勢参宮名所図会』の著者が『勢陽雑記』を参考書籍として挙げているにも拘わらずその由来を採用しなかった背景には、『伊勢参宮名所図会』の著者である蔀関月が『勢陽雑記』の銭掛松の由来は「糺されるべき妄説」であると考えたことがあるとしている。[7] また、『伊勢参宮細見大全』においても『勢陽雑記』や『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』に記された銭掛松の由来は「鄙俗の難説なり本説次に詳なり」[8]として、豊斟渟尊の社跡であったとする説を述べている。

なぜ『勢陽雑記』の説が主流となるまで広まったのか。『勢陽雑記』や『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』に記された銭掛松の由来を「妄説」「鄙俗の難説」とする理由について、『伊勢参宮名所図会』や『伊勢参宮細見大全』は他の説を挙げるだけである。しかし、何もないところから新たな由来は生まれない。『伊勢参宮名所図会』では、松の枝に掛けられた銭は御供料であると記されている。ではその御供料の対象は何であろうか。当初は小祠や社であっただろう。だからこそ『勢陽雑記』に記された、参宮者が伊勢神宮に参詣する代わりに松に銭を掛けたことが「銭掛松」の由来であるとする説を「妄説」「鄙俗の難説」と批判しているのである。この伝承がこれら二書により強く否定されていることは明らかであり、当時は『勢陽雑記』の説が主流であったと考えなければならない。人々にとって松に掛ける御供料の対象は伊勢神宮、天照大神だったのである。『勢陽雑記』からは参宮者の御供料の対象が松の木ではなく伊勢神宮そのものに変化する契機が見てとれる。そしてそれが当時の主流だったからこそ、豊久寺はあえて『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』の題材に『勢陽雑記』の説を取り入れたのである。

『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』に記された命姫と盲人の伊勢参宮は、『伊勢参宮初心書』（明和五年〈一七六八〉）では「都の息女壱人座頭壱人参宮するに」[9]、『古留屋双紙』（天明八年〈一七八八〉）では「銭掛松ハ昔盲目此松ニ銭ヲ掛大神宮遥拝ス」[10]と記されるなどして当時の地誌類に影響を与えた。また現代においては津市教育委員会発行『津市の歴史散歩』（平成七年〈一九九五〉三月改訂再版）「銭懸松」の項に『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』の説が記載されており、豊久寺から始まった由来が広く語られるようになったことが分かる。命姫の夫として登場する篁の隠岐配流については、江戸時代では歌舞伎や浮世草子などで広く認知されていた。『勢陽庵藝縣高野尾村銭懸山豊久寺略縁記』に記された銭掛松の由来は、流された夫の帰京を願う妻の伊勢参宮から人々に膾炙した。この、同情を抱かずにはいられない物語性の強さが人々の興味を惹き付けたに違いない。

（岡本夏奈）

『伊勢参宮初心書』付図（一丁裏・二丁表）

【注】

1 近藤瓶城氏・近藤圭造氏編輯『改定史籍集覧 第二十七 新加書雑類』（明治三十五年十二月 近藤活版所）所収。

2 大江文坡『小野小町行状記』（明和四年／全七巻七冊）。早稲田大学図書館所蔵古典籍総合データベースに掲載されている（文庫三〇 E一六七）。

3 谷川健一氏他編『日本庶民生活史料集成 第二十六巻 寺社縁起』（平成五年三月 三一書房）所収。

4 柳田國男氏『定本 柳田國男集 第七巻』（昭和四十三年十二月 筑摩書房）所収。

5 義田孝裕氏「『伊勢参宮名所図会』の編纂姿勢―銭掛松の記述をめぐって」（『遊楽と信仰の文化学』所収。平成二十二年十月 森話社）。

6 山中為綱氏『三重県郷土資料叢書 第十三集 勢陽雑記』（昭和四十三年十月 三重県郷土資料刊行会）。

7 注5に同じ。

8 今井金吾氏監修『道中記集成 第十二巻 伊勢参宮細見大全・東行筆記』（平成八年六月 大空社）。

9 『江戸の絵本―初期草双紙集成―I』（昭和六十二年五月 国書刊行会）所収。

10 古谷久語氏『三重県郷土資料叢書 第二十一集 古留屋草紙』（昭和四十四年五月 三重県郷土資料刊行会）。

20. 一遍上人熊野成道御影／一遍上人御鏡之聖像

木版黒摺　五六・八×十九・〇cm　江戸時代末期
五六・八×一九・六cm　江戸時代末期
（宮島コレクション蔵）

かつて一遍は、熊野権現から神託を受けて、念仏札を配り念仏を勧める聖としての絶対的な信を得た。それは一遍の生涯のなかでも最も重要な奇瑞であり、時宗にとっては立教開宗の契機とされる特別な神との邂逅とされる。

その姿を、『一遍聖絵』や『遊行上人縁起絵』（以下、『聖絵』『縁起絵』と略称する）は本宮證誠殿を舞台に、神託を受ける一遍と、九十九王子の化身である童子に賦算する一遍を同一場面に一連の霊験として描きあらわし、神話的な起源の光景に象った。この神託を使命として、念仏札を手に諸国を遊行し賦算する一遍の姿は、時衆の祖師を象徴する図像として絵画化され、あるいは兵庫観音堂（現在の真光寺）の廟堂（御影堂）や無量光寺をはじめ多くの道場に造像される。

当麻山無量光寺から頒布された二様の御影は、そうした熊野権現の神託を受ける一遍と、賦算遊行する一遍上人の像であり、いずれも時衆にとって最も根本的な神話というべき立教開創の伝承に根ざした図像である。このうち前者の「一遍上人熊野成道御影」（以下、「成道御影」と略称）では、一遍は片膝を立て、腕の中に顔を埋めて目を閉ざす。そのもとに、熊野権現は長頭巾をかぶり、手に数珠を持ち、白い浄衣に袈裟をまとう山伏の姿で雲に乗って影向し、髭を蓄えた口元を開いて神託を授ける姿で描かれている。

この図が拠った『縁起絵』を見ると、神託を受ける一遍の姿は、一定のパターンによってあらわされる。『聖絵』（第三巻第一段）では、一遍は御殿の前に座し、合掌して熊野権現から神託を受ける姿で描かれていた。それは、権現の神慮を仰ごうと本宮證誠殿の御前に詣で、願意を起請し、「目をとじていまだまどろまざる」うちに、御殿から出現した熊野権現の教えを受けて他力本願の深意を悟ったと詞書に記す様子を図像化したものである。

熊野證誠大権現

一遍上人

これを、『縁起絵』（第一巻第二段）は、熊野権現と一遍の姿をより大きく描き、強調してみせた。しかも、目を閉ざし頭を垂れる一遍の表情がはっきりと見えるよう、顔だけを権現から背けるように描いたり（例えば光明寺本[2]・安土桃山時代）、或いは片膝を立てて目を閉ざす姿を正面向きに描いたり（清浄光寺本[3]・室町時代）など、その表現は大きく異なっている。

詞書によれば、このとき熊野権現は、一遍に対して、「融通念仏勧むる聖」と呼びかけている。かつて、融通念仏の祖師として名高い良忍は、睡眠中の夢を介して、阿弥陀如来から「教勅」を得たという。その霊験は、『融通念仏縁起』絵巻において、脇息にもたれて眠る良忍のもとに来迎する阿弥陀如来の像をもって描きあらわされた。そうした夢中感得の表現を踏まえれば、頭を垂れて目を閉ざし、或いは片膝を立てて目を閉ざす一遍の仕草は、権現の神託を待ち受け「いまだまどろまざる」入眠直前の状態のなかで、権現から直々に教えを授かり悟りを得たことを示す、聖なる感得の図像表現であったといえる。

また、「成道御影」の画面上部には、次のような四句の偈頌が記されている。

六字名号一遍法　十界依正一遍体
万行離念一遍証　人中上々妙好華
（「南無阿弥陀仏」の六字名号を一遍称えれば、その声はあらゆる世界を包み込み、みな等しく成仏できる。万ずの雑行雑念を離れた一遍の念仏こそ人にとって最も大切なもの。泥の中から花開く白蓮華そのものなのだ）。

『聖絵』や『縁起絵』によれば、それは一遍が自ら作った偈頌であった。四句の首字を一字ずつ取ると、「六」「十」「万」「人」の文句が現れる。一遍はこの四句の偈頌に、六字名号こそがあらゆる衆生（六十万人）の往生を約束する手立てであること、またそれを自らが「一遍」という名のもとに、人々に勧めて「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の念仏札を配ることの意味を象り、実践したのである。『聖絵』が第三巻第二段を丸ごと費やして念仏札の文の意味を釈するように、この偈は一遍による賦算と念仏利生の真正性を支える重要な聖句であった。

その伝統のもとに作られた「成道御影」は、更に無量光寺独自の縁起を重ねて読み解かれるべき図像であった。近世に無量光寺から刊行された『開山遊行元祖一遍上人御鏡霊像縁起』[4]（以下、『御鏡霊像縁起』）には、一遍の熊野参詣をめぐり次のような叙述がみえる。

開山一遍上人は、紀州熊野本宮に百日間の参籠を行い、満願の夜（建治二年三月二十五日）に熊野證誠大権現から直々に「神勅」を相伝した。その神頌には「六字名号一遍法　十界依正一遍体　万行離念一遍証　人中上々妙好華」とあり、権現は、この四句の文の頭文字をとった金印を一遍に与えた。それが今に至るまで「化益名号」と称えて施される「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」である。以来、一遍はこの名号の札を手づから諸人に施し、その功力によってみな現世と来世の利益に預かることができた。なお末世の衆生のためにと、一遍は鏡に自らの姿を写して影像を彫刻し、当山に残した。それが、道場に安置され「鏡の御影」と崇められる尊像である（取意）。

これにより、「成道御影」が描くのは、権現から一遍へ、神頌と金印が相伝されたその時であり、上部の偈頌は、一遍の辞（ことば）でなく、熊野権現の下した神勅の聖句であったことが理解される。いわば〝熊野相伝御影〟とも呼ぶべきこの図に視覚化されたイメージを経て、『御鏡霊像縁起』が、本堂に安置され版にもあらわされた鏡の御影の由来（前号解説[5]参照）を語ることからは、二様の御影がともに開山祖師一遍の賦算の始まりと念仏札の利生をあらわす一連の縁起図像として、おそらく同一の絵師により描かれ、流布していたことも知られる。

このような無量光寺独自の神話世界を再現し、念仏と賦算を行う重要な儀礼の場こそ、歳末別時念仏会である。『縁起絵』最終段（第十巻第三段）には、二祖他阿上人により、当麻道場で営まれた歳末別時念仏会の場が描かれている。無量光寺は、その伝統を受け継ぎ、歳末別時念仏会を近代に至るまで勤修した霊地であった。現在は営まれていないが、その記録が『神奈川県民俗芸能誌』に報告されている[6]。

それによれば、当日のしつらいとして、本堂の本尊一遍上人（鏡の影像）の前には、阿弥陀像、熊野権現像、一遍上人像が安置された。向かい側の

柱には、熊野権現と一遍の画幅が掲げられる。さらに、中央には鑽火の場を設け、導師が結衆の僧俗に秘法十念を授ける「一すり火」の勤修が営まれた。これらの宗教空間を構成する画幅として同書に掲載されていたのが、版本の「成道御影」である。[7]「成道御影」は、歳末別時念仏会の場に掲げられ、儀礼のなかで一遍が権現から神勅を相伝する神話を再現する、核心的な図像としてはたらいていた。

熊野における「神勅」相伝の縁起は、『新編相模風土記』[8]（天保十二年〈一八四一〉成立）にも見え、一八〇〇年代には広く流布していたことが知られる。そこには、このときの「神勅」および口伝を当麻山の歴代住持が相伝したことも明記されている。また、熊野権現像は一遍の作で像高四寸ほどの立像であり、その側に安置される一遍上人像の長は三寸ほどで二祖他阿の作とされ、二像は並べて「神勅伝法の本尊」と呼ばれたと伝える。これらの情報を踏まえると、別時念仏会において一遍上人像の前に安置された阿弥陀像と熊野権現像および一遍上人像も、阿弥陀の垂迹である熊野権現から神勅を相伝した一遍の後継者である当代の上人が、秘法十念を授け、結衆に賦算を行ううえで欠かせない儀礼本尊であったことが理解される。

歳末別時念仏会の場に熊野相伝の御影が掲げられる様相は、現在も藤沢清浄光寺（遊行寺）において毎年十一月二七日に営まれる「一つ火」の場で見ることができる。この日、御影は内陣正面に、別時念仏の本尊となる報土名号および別時名号が掲げられるなかにあって、導師である遊行上人の座に最も近い位置に掛けられた。その前には、御一（おいち）の箱とよばれる熊野祠が置かれる。御影は上から薄絹をかけて、権現の像を見えないようにしているが、法会の間だけ裾を僅かに上げて、神託を受ける一遍の姿のみ拝めるようにしつらえる。そこからのぞく一遍の像は、肉筆で彩色され、目を閉じて頭を垂らし、顔だけを後ろに背けて座している。

江戸時代に清浄光寺から刊行された『相州藤沢山無量光院清浄光寺略縁起』[9]を見ると、そこには一遍が熊野権現に百日参籠の折に権現の示現をうけて四句の偈頌を授かったこと、この文を得悟してより名を一遍と改め、賦算を行ったという由緒が記されている。

清浄光寺の念仏札

清浄光寺の側でも、御影は一遍が権現から神勅を授かる相伝の図像として語られていたのであり、一つ火が勤修されるときには、道場に熊野権現が影向するなか、熊野における一遍の神話を再現する図像として立ちはたらくものであった。

しかも、清浄光寺では、一遍に代わって当代の遊行上人が秘法十念を授けたあと、上人が手づから念仏札を配る儀礼が、今日なお行われている。この法儀の道場に掛けられた権現神勅御影は、熊野権現から一遍へ、更に一遍から当代遊行上人を介して一切衆生へと、念仏が相続され、衆生の往生を約束する証となる念仏札が授与される儀礼空間を支える上で不可欠な、いわば神話的光景を象る図像であった。

加えて清浄光寺には、神勅相伝の場に現れた権現を立体化した熊野権現立像も伝わっている。それは近年まで、小書院に安置されていた[10]という。清浄光寺の小書院とは公式の法務や特別な法要が執り行われる執務室にあたり、歳末別時念仏会では、二七日の結願法要が本堂で行われるほかは、十八日の連歌式をはじめ寺僧間での主要な法儀は主に小書院で勤修された。

つまり、小書院は熊野権現の来臨のもとで歳末別時念仏をいとなむ儀礼空間であり、そこに安置されていた清浄光寺の熊野権現立像も、無量光寺のそれと同様に、そのために重要な儀礼本尊であった。黒漆を施した権現像の像高は一三・二糎（四寸）、長頭巾をかぶり、口元に長い髭を蓄え、浄衣に袈裟をまとい手に数珠を持つ山伏姿を見せる。無量光寺の立像も四寸であり、『神奈川県民俗芸能誌』[11]の掲載写真によれば、やはり長頭巾に長い髭を蓄えた山伏姿である。持物は失われているが本来は数珠を持って

いたであろう。それは「成道御影」に描かれ、道場に来臨する熊野権現の分身であり、無量光寺では前述の通り、一遍像とあわせて「神勅伝法の本尊」と重んじられていたのである。

無量光寺の別時念仏会においても、一すり火の勤修ののち、結衆の相続に対し、上人による念仏札の賦算が行われたはずである。前述の『御鏡霊像縁起』には、その形木となる金印が熊野権現から与えられたことが記されていたが、この金印をめぐって『新編相模風土記稿』にはさらに興味深い記事が見える。そこには、「六字名号銅印一顆」として、一遍が権現から附属された印が「当山御印文」と呼ばれていたことに加えて、常には開山上人の背に収められ、五十年に一度、道俗に披露（開帳）されていたと記す。[12]

金印を収めた開山上人像とは、一遍自作の由緒を持つ本尊一遍上人像、つまり御鏡の霊像にほかならない。霊像は、その背に熊野権現附属の金印を納めて、口に念仏を称えつつ手に念仏札を持って合掌する。それは、無量光寺に参る信徒に、当代の上人を介して念仏札を授け続けることを可能とする、一遍の念仏相続の権能の化身であった。

このように見ると、「成道御影」と「御鏡之聖像」は、一連のものとして無量光寺の縁起や念仏相続の儀礼に根ざしつつ、結縁する人々に、その宗教空間を簡略ながらも仮想的に追体験させる具であったといえよう。鏡の影像の霊場として信仰をあつめた無量光寺は、旱魃にも枯れることのない「笈退りの水」や、養蚕に関わる信仰も深かった。六字名号の功力は、極楽往生のみならず地域の人々の生業をも広く守護したのであり、その根源的な図像が「成道御影」であり「御鏡之聖像」であった。

二枚の御影は、天地を切り揃え、並べて一幅に表装されていた。それはこの二図が、一体となって立ちはたらく利生をよく知るものの手により永く大切にされてきた証左といえる。

（阿部美香）

【注】

1 朱印二顆を捺す。宮島コレクションには、同じ御影が他に一枚存する（宮島鏡、関口静雄監修『第六回　おふだの文化史展〜宮島おふだコレクションより』二〇一二年、所収）。

2 特別展図録『重要文化財　光明寺本遊行上人絵』最上義光歴史館、二〇一三年。

3 特別展図録『国宝　一遍聖絵』神奈川県立歴史博物館、二〇一五年。

4 『神奈川県史資料編8近世（5下）』（一九七九年）所収。

5 「18一遍上人御鏡之聖像」（「一枚摺の世界―その小釈の試み（6）」『学苑』九〇五、二〇一六年）。そこに紹介する御影は、本稿に掲げる御影と同一画像であるが、また別の一枚（宮島コレクション蔵）である。

6 永田衡吉『神奈川県民俗芸能誌　続編』神奈川県教育委員会、一九六七年。

7 他の掛け軸を掲げる場合もあるという（前掲『神奈川県民俗芸能誌　続編』第七篇第四章）。

8 『新編相模国風土記稿』巻之六十八　村里部　高座郡巻之十「無量光寺」の項。

9 特別展『遊行寺とおぐり』遊行寺宝物館、二〇一四年。

10 前掲『国宝　一遍聖絵』。

11 前掲『神奈川県民俗芸能誌　続編』第七篇第四章。

12 六字名号金印（銅製形木名号）は、現在も無量光寺に伝存する。小野澤眞「相模原市南区・当麻山無量光寺調査詳報」（『相模原市史ノート』一一、二〇一四年）所収文化財目録、『時宗当麻派七〇〇年の光芒』（日本史史料研究会企画部、二〇一五年）特集口絵⑤には銅版と木版の念仏札の写真が載る。

（本研究はＪＳＰＳ科研費１５Ｋ０２２５の助成を受けたものである。）

（せきぐち　しずお　　歴史文化学科）
（おかもと　かな　　大学院生活機構研究科生活文化研究専攻二年）
（あべ　みか　　歴史文化学科）